



明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願ひ申し上げます。

平成 28 年度 JKA 補助事業

「高齢者グループリビングの社会的普及に向けた実践的調査研究事業」

経過報告

調査研究の委員会を立ち上げ先駆的な高齢者小規模共同居住の運営者やこれからグループリビングをつくりたい事業者を対象に法人の成り立ちや既存事業、地域性などが異なる中で、どのような運営をされているか、調査を行っています。運営の工夫や課題から学ばせていただくことで、豊かに暮らすことができる高齢者住宅を普及させる道筋を探りたいと思います。

12月末まで狛江共生の家（東京都狛江市）、ほっと館（東京都江戸川区）、ぐるーぷ藤一番館（神奈川県藤沢市）、おひさまくらぶ（宮城県仙台市）の調査を行いました。今後14件の調査を2月末までに終了し、3月4日のワークショップで調査報告を行う予定です。

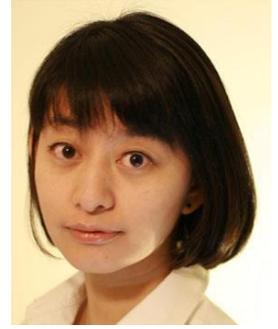
■委員会メンバー(アイウエオ順)

上野勝代	神戸女子大学名誉教授
大江守之	慶應義塾大学総合政策学部教授
小島美里	NPO法人暮らしネット・えん代表
近兼路子	慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程
土井原奈津江	慶應義塾大学SFC研究所上席所員
中西真弓	神戸山手短期大学現代生活学科准教授
宮野順子	兵庫県立福祉のまちづくり研究所研究員



インタビューの様子

会員紹介



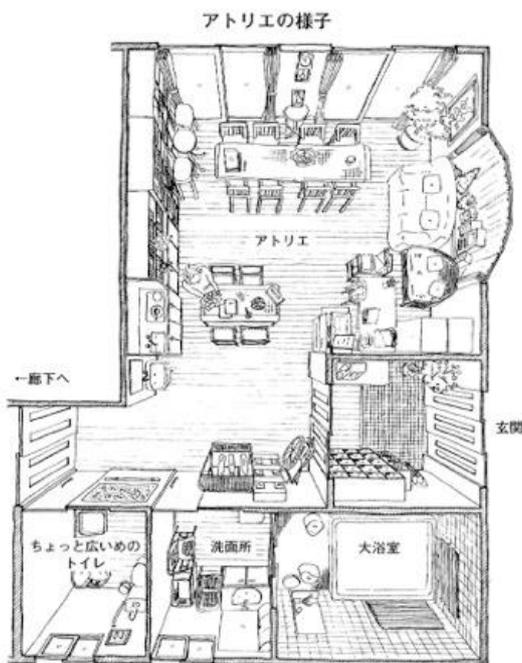
兵庫県立福祉のまちづくり研究所
研究員 宮野順子

はじめまして。宮野順子と申します。兵庫県立福祉のまちづくり研究所で研究員をしています。私をはじめで COCO 湘南台とであったのは、2001 年でした。当時建築学科の大学院生で、「仲間とともに暮らす」という住み方をしたいという人たちを研究対象にしていました。ところが、希望はあっても実際に住むとなるとなかなか実現しない。そんなジレンマをもっていたところでした。

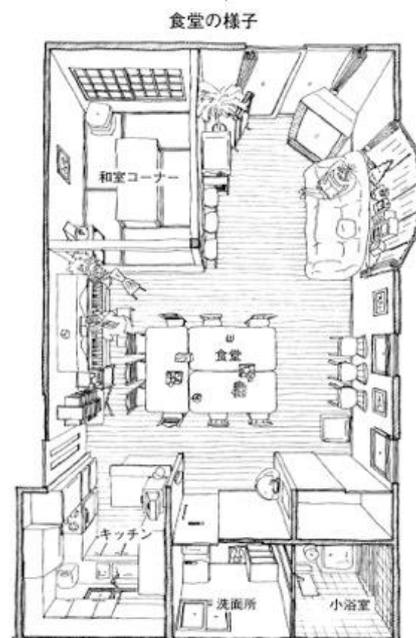
そこで出会ったのが西條先生の「10人10色の虹のマーチ」の著書です。まさにこれだ、と得心したのを覚えています。すぐに連絡し、西條先生から「クリスマスパーティがあるから、それにいらっしゃい」とお招きいただきました。ゲストルームで1泊して、お住いの様子を伺いました。

その後、設計ができるようになりたいと建築設計事務所で勤務しながらも、「グループリビング研究会」などと称して、細々と活動を支援していました。約10年後に博士課程に進学したのを機に、改めて COCO 湘南台を訪ね、グループリビング運営協議会のみなさまにつながる事ができたというわけです。

今年度は JKA の補助事業調査の一端に加わり、全国のグループリビングをみる機会をいただいています。改めて、グループリビングは、それぞれの「地域をよくしたい」と想う気持ちが生み出した住まいなのだ、ということを確認しました。また、熱意ある運営者の方々に出会い、胸を打たれています。みなさまにその様子をご報告できることを楽しみにしています。今後ともどうぞ宜しくお願いします。



正面玄関を入ると、まず、アトリエに出る。
説明会が行われるなど、coco湘南台の事務室的な場所でもある。
夜は、大浴場が稼働しているため風呂上りに休憩する場所にもなっている。
大浴場からは、にぎやかな声が聞こえていた。



食事の時間になると、皆ばらばらと集まってくる。
配食サービスを利用しているため、キッチンは配膳と片付けだけとなり、意外にこじんまりしている。
サロンコンサートなど、イベント時もこちらを使っていた。

図 2001 年当時の調査をもとに描いた COCO 湘南台のアトリエ(1F)、食堂(2F)の様子

わかば館（北海道小樽市）

共同住まい研究会「来夢」
代表 若西カナ子

「わかば館」の誕生

“わかばがすくすく育つように、未来に夢を持って暮らしたい” “1人暮らしの寂しさ、孤立や孤独から気楽に集るところがあったらいいね” “何処かに入ろうと思うが資金的に難しい”などの意見から、共同住まいと気軽な地域サロンを目的に「わかば館」が誕生しました。

私は、「小樽市高齢者懇談会杜のつどい」（2005～）で高齢期の生活について様々な学習を続けていたのですが、2010年に登別の「いぶりたすけ愛の家」を見学させていただき星川さんにたくさんのお話を伺いました。2011年3月、仲間数人と登別ワークショップ（NPO法人COCO湘南主催）に参加するつもりで小樽を出発しました。東日本大震災の翌日でしたが飛行機も電車も止まっている中、小樽からは高速道路で登別まで行けたのです。フォーラムは中止になりましたが、星川さんの案内で再度「たすけあいの家」を見せていただきました。

2011年4月から、講座「共同住まい研究会」をスタートさせ、自分たちの高齢化の課題の中で一番重要なのがどこにどう「住まうのか」、いつから住まいの形態を「変えるのか」等話し合いを深めました。ひとつの解決策として「共同で住まうことを実現させる」を目標とし、2012年秋に「街中で歩いて用事が足せる範囲にある中古住宅」という一つの課題をクリアする物件を見つけることが出来ました。実験第1号として「わかば館」と名付け2013年8月オープンしました。「街中」で「ある程度の広さ」（50坪）があることから、手仕事を中心とした工房・サロン・喫茶なども併設しようということになりました。

■ ねらい

- ・ 仲間づくりで孤立・孤独を防止し、安心安全の暮らしを実現する。
- ・ 毎日の生活に目標を持ち、生き生きとした暮らしを実現する。
- ・ できることをして社会に貢献し、たすけ愛の暮らしを実現する。

■ 事業計画

- ・ 自立と共生の住まい「共同住まい夢の森」事業 定員4名
- ・ 地域住民の交流に関する事業
 - ・ サロン事業 喫茶・軽食ライム 年間1200人の利用目標
 - ・ 手しごと工房来夢、各種教室・貸し教室・ギャラリー・読書室
 - ・ マイショップ事業 創作活動での作品の展示販売・不用品リサイクル
 - ・ 各種相談対応
- ・ 情報発信事業・ホームページ作成と更新、視察対応
- ・ その他

1) 「共同住まい夢の森」(自立と共生の住まい)

「共同住まい夢の森」の目標は、「いつまでも自分らしく、出来ることを分担しながら、新たな生活の場とし、お互いに助け合い、日々有意義に生きていてよかったと思える暮らしを実現する」ことです。定員4名(現在3名)、女性のみ、月額費用9万円。内訳は住居費3万円、運営費等3万円、食材費3万円ですが頂き物や菜園での自給野菜があり半額くらい戻りますので実質7.5万円、冬季は暖房費6000円を加算します。10万円以内に収めるというのが実現しました。食事をバランスよくキッチンと食することが健康維持に大切なことです。



2) 「喫茶・軽食ライム」(サロン事業) 年間1200人の利用目標

健康に良い食事の提案と提供をする。①減塩レシピ②バランスの良い食事③旬のものや地場の食材④加工食品を減らす⑤添加物をなるべく使わない、等々。手間暇をかけたごく普通の家庭料理がメニューの中心です。金・土曜日、月8回の通常営業の他に、イベント『雪あかりの路』期間は500円食券で食べられるボランティア食堂を営業しています。目下「子ども食堂」を企画中です。

3) 手しごとと工房来夢

タンスに眠っている着物や服などの再利用・再活用を通して孤立しがちな高齢者が集い交流し、毎日を有意義に過ごそうと火・水・木曜日午前10時から午後4時まで開いています。各曜日に経験豊かなメンバーが相談に乗り縫い方のアドバイスをしています。ボランティア的な活動ですが参加者は500円を担当者に払います。工房の使用料は一日1000円を担当者からいただきます。毎回6~8人ぐらいの参加があり多い時は10人を越えます。平成27年度は年間で138回開催し、1135名が参加しています。工房のない日は、単発で特別講座が開かれたりします。眠っていた着物がリメイクされて普段に着られる服に変化することはもちろんですが、新しい人間関係ができ楽しめる場ができたこと皆は喜んでいるようです。お昼は弁当を持参し、その他に手料理も持ち寄って振る舞いたっぷりと一時間おしゃべりが弾みます。



4) 各種教室

月曜日に、着物着付け教室、和裁教室、編物教室、習字教室があります。参加人数は多くありませんが工房の日とは違った趣があります。教室使用料は1回500円で、生徒さんからは月謝や参加料を各先生がもらっています。

5) マイショップ事業 (創作活動での作品の展示販売・不用品リサイクル)

各教室担当者に寄贈された着物などのリメイクをお願いしています。もう着ない、家を片付ける、などの方々からたくさんの着物類が寄贈され、今風のデザインに仕立て直したものを販売しています。手間のかかる仕事ですが、値段は安く設定されているので試着して気に入れば購入いただけます。痛みや汚れが激しくリメイクの難しいものは裂き織にすることで活用しています。また、年2回の『来夢まつり』を企画し楽しんでいただいています。遅く来ると気に入ったものがなくなると開店を待ちかねている人、遠くからバスや電車で来られる人で会場は人で動きが取れなくなります。食堂もオープンしますのでお弁当やケーキも楽しみにされているようです。リサイクルの服も寄贈されるのでこれも100円200円と安く販売しています。

6) 各種相談対応 (FP相談室)

相談内容により専門家に繋げるべきことと、サポートすればいいこと、アドバイスすればいいことなど、まずお話を聞いて事例により判断します。これまでの事例では、①家の維持管理や将来的見直しアドバイス、②交通事故の対応で専門家を紹介、③遺産相続でアドバイスと専門家の紹介、④将来の不安相談に成年後見制度や介護保険のアドバイス、包括センターやケアマネジャーに繋げる、⑤不用品の処分にバザーを企画実施、⑥入院保証人や身元引受人の実行、⑦家の片づけ掃除、等々内容はいろいろです。相談料は無料です。

7) 来夢ガーデン (新たに加わった事業)

隣地が借用できたので、駐車場と花畑を作りました。自然に咲く花を大切に、その中に球根や一年草の苗を植えています。春先のタンポポやスマレから始まり、花が途切れなく咲く庭を目指しています。野菜畑も作り新鮮な菜っ葉やトマトなどの収穫を食卓で楽しんでいます。昨年・今年と「小樽市花いっぱいコンクール」に応募し「奨励賞」をいただきました。



8) その他 (研修・ホームページ・助け合い)

年金・医療保険・介護保険の先行きが見えません。これからの私たちの生活がどうなるかは非常に難しい問題です。小樽市の高齢化率は38%に近づきました。学習や研究、チャレンジが必要です。ホームページは毎月のお便りが更新されます。

「わかば館」に時々見学の方が見られます。普通の民家を使っているというのが珍しいかもしれません。その他にガレージセールを企画して荷物の整理を手伝ったり、緊急に助けてと呼び出しがかかったり、買い物や食事の支度、葬儀の手配まで頼まれたりします。

共同住まい夢の森の現在

契約は部屋の賃貸借契約です。費用は家賃3万円、運営費3万円、食費3万円で月計9万円ですが食事は皆で作ることを原則にしているので、食材費の余りは返却します。頂き物が多いので半分くらいは返せます。リホームで借りたお金の返済が終わったら家賃を下げる予定です。現在2名の入居者と管理者の私の3名が住んでいます。

86歳のB子さんはケアマネージャーからの紹介で2年前に入居しました。生活保護を受けアパートで暮らしていましたが独居が難しい状況になり入居先を探していました。自由に出歩ける場所にあることが必要だったので、週2回デイサービス以外の日は毎日のように駅前スーパーのたまり場で仲間と顔を合わせる日課でした。グループホームには該当せず、しかしサポートが必要な時期の生活施設がない、いわば自立の危うい人の受け皿がないことに気づかされました。自分の名前が書けますから悪徳商法のターゲットにもなっていました。周りの人が気を使うことも多いですが、工房や食堂のお客さんとも仲良くしていて「誰かの役に立ちたい」というのが口癖の女性です。現在介護度は3になりサポートが必要です。ここでいつまで暮らせるか気がかりなもの多くを学ばせていただいています。

C子さんは隣町に住んでいました。ご主人を亡くし大きい家に独り暮らしをしていましたが、家を人に貸し、しがらみから抜け出し自分の人生を生きる決めて入居しました。元気な70代ですので生活の拠点を移しても今までの趣味や活動を継続し、ボランティアや娘や孫のお助けマンで飛び回っています。B子さんとの関係も良好で頼りにされています。周りからはこの選択をすごい、うらやましいと思われると言っています。

今の生活に満足しているようです。

最初に入居した A 子さんは 7 か月で次の住まいに移りました。わかば館スタートの新聞記事を読んでこれこそ望んでいた暮らしだと、少し離れた町から自宅を売りに出して引っ越してきました。階段の昇降ができなくなった時最後までここには居れない、という判断で、入居までは 1~2 年はかかると思ってケアハウスに申し込んでいました。半年足らずで OK となり、迷いながらもケアハウスに移りました。

さて、最初に自分たちの老後の住まいはどうしようと考えていた仲間からの入居は、まだ早いとか荷物がまだ片付かないといった理由で断られています。頭でこんなのがいいね、とは言ってもいざどうぞと言われると実行はできないという現実があります。世間体や見栄もあるようにも感じます。最近体調を崩し一人での生活がしんどくなってきた人から面倒を見てほしいような言葉を聞きますが動けるうちは独居がいいと思う人がほとんどのようです。ですから目標に掲げた「自立した人たちが助け合い自己実現を図る」という言葉はスローガンであって実現を望んではいけないのだと弱気になっています。この建物がいいね買おうとは言っても、お金を出すという人はいませんでした。登記や税金、決算申告を考えると一人の名義が都合がよいと考えたので私の個人名義で購入をしました。リフォームは借入金で行いましたのでその返済が終わるまではしっかり管理運営しなければならないのです。

3 年を経過した中で考えることは、誰でも自分の安心も考えて自宅に何人かを受け入れ、この住まいのスタイルを実行できれば、金銭的メリットを含めて高齢者の問題のいくつかは解決できる、ということでしょう。「公的な施設は作らない、サ高住で対応してもらおう」という政府の目論見が、高齢者の急増には対応できなくて、金銭的にも無理のある高齢者にとってみれば、すでにある中古住宅や空き家を活用する私的な住まいこそ注目し活用しなければならない時になっているようにも思います。しかしこの不確かな住まいに進んで身を置こうとする人をどう見つけ出し、運営していくかが大きい課題と思います。

連絡先 047-0032 小樽市稲穂 3 丁目 1-9 わかば館 (電話・ファックス 0134-64-1550)

「共同住まい夢の森」「喫茶軽食ライム」「手しごと工房来夢」

「来夢ガーデン」「FP相談室」・ホームページ「来夢小樽」

Mail:raimu@ktf.biglobe.ne.jp (若西)



この会報は、公益財団法人 JKA 補助事業「お年寄りが幸せに暮らせる社会を創る活動」で運営されています。

編集後記 今年度の補助事業の調査にあたり、先駆的な高齢者小規模共同居住の事業者の共通点は、当事者の立場で支え合おうという思いを持って事業をされていることでした。継続的に事業を行うことと当事者を尊重することがバランスできる運営システムや地域システムについて模索していきたいと思います。

編集委員 土井原奈津江